

「新しい東北」官民連携推進協議会
令和2年度 岩手県意見交換会（第2回） 議事概要

令和2年9月29日
「新しい東北」官民連携推進協議会事務局

【日 時】令和2年9月29日（火）15:00～17:00

【場 所】復興庁 岩手復興局 4階 会議室

【出席者】

<副代表団体>（順不同）

株式会社岩手銀行、岩手県、国立大学法人岩手大学、特定非営利活動法人いわて連携復興センター、
復興庁総合政策班、復興庁岩手復興局

<事務局>

PwC コンサルティング合同会社

【議事概要】

1 開会

1.1 開会の挨拶

今年度は、東日本大震災から10年の節目となるため、次年度以降への橋渡しとなる重要な年度となる。実践の場に向けて、そのような意義を皆様と共有しながら、意見交換会で活発な議論をしていくために、引き続きご協力を賜るよう、復興庁より挨拶した。

2 各団体の取組紹介

各参加団体より、取組紹介資料（資料2-1以降）をもとに取組を紹介した。

3 実践の場の企画詳細に関する説明

事務局より、事務局提出資料（資料1）をもとに、実践の場の企画詳細を説明した。

4 意見交換

企画の方向性は、これまでのつながりの強化と、新たなつながりの創出の両方の要素を入れることで検討を進める。具体的には旧交を温めるために、過去につながりがあった方や同じ地域と関わりがあった方が集まり、復興活動当時の思い出を振り返り、今後の関わり方について話し合うイベントとする。本日挙がった意見を踏まえ、企画内容を詳細化し、参加者への呼びかけを進める。

<主なご意見>

- ・ 新しい関係作りは、取組の積み重ねで生まれてくるものだと思う。震災から10年目の節目で、いきなり新しい関係を作るアプローチ方法のイメージが沸かないため、関係がある方々から再構築し、そこから新しい関係を作っていくのが良いのではないか。

- ・ ワークショップ形式だと、地元団体や個人の方は参加したいとあまり思わないのではないか。また、課題解決型のワークショップは、実践の場を通じて課題解決につながるイメージが沸きづらい。例えば市町村単位でグループを分けて、地元の方を集めて、旧交を温める場にすれば、参加者の懐かしや共感、満足感も生まれ良いのではないかと思う。
- ・ 関係人口をテーマとする場合、特定の事業者との関係よりも、地域や地区との関係をイメージしている。
- ・ 過去に応援職員を経験した方の中には、赴任先の自治体とつながり続けている方もいるが、岩手県への応援職員については、現在も当局からもマーリングリストを活用する等してやりとりは続けている。
- ・ 第1回意見交換会では、復興10年目のため、岩手県内の復興状況を県外に発信し、アピールすることでつながりが生まれるのではないかと議論した記憶がある。実践の場を通じて必ずしも新しいつながりを生み出さなくとも良く、一つの通過点・きっかけを作れれば良いのではないか。関係人口の増加を目的としながら、復興状況をアピールできればと思う。
- ・ 復興局は2～3年で職員が入れ替わりながら、復興活動に関わってきているが、その方々が10年の節目で、岩手の現状に关心を持つと思っており、それを捉えつつ情報発信をしていくことが重要だと考えている。
- ・ 関係が続いているつながりもあるため、関係の強化の方向性を無くす必要はないと思う。過去の関係強化と新たなつながりの両方を含めたテーマ設定が良いと思うが、議論をするためには具体的なテーマ設定が必要なため、課題解決型ではないサブテーマを何か設定した方が良いと思う。
- ・ 岩手県庁としては、震災から10年を迎えるにあたり、震災への関心低下と風化を課題と認識している。10年目の節目として、実践の場が何か糸口を見つけるイベントになればと思う。未来志向でネットワークを広げることは重要であるが、今までのつながりが土台となると思っている。今までのつながりから、他の知り合いの方につなげていくことで、新しいネットワークが広がっていくのではないか。そのようなイベントになれば良いと思う。
- ・ 新型コロナウイルスの環境下において、制約の観点に縛られるのではなく、新しいつながりを模索できると考えている。ICTの活用によりリモートができ、新しいつながりを生むことができるため、チャンスとして捉えたい。また、Go To キャンペーンも取り入れながら、岩手に来てもらうことも考えても良いのではないか。
- ・ 実践の場は当初より、参加者が震災からの思い出を話す会が良いのではないかと考えている。滞在時期はそれでも良いので、同じ地区に一時期いた方や地区と関わりがあった方がグループを作り、思い出を話し、写真等も使いながら共有する場をイメージしている。思い出話を理解、共感するためにもグループの分け方は、地域ごとが良いと思う。地元の方も、登壇者ではなく、参加者として参加して、一緒に思い出を話せるのではないか。実践の場の第1部は思い出を話す会とし、第2部は今後地域と関わるとした際どのような関わり方があるかを議論する会になれば良いと思う。参加者の中から困っていることの話が出て、参加者間で解決策を話し合うことに結びつく可能性もあると思う。
- ・ 復興庁として、今までの取組の中から生まれたノウハウ・知見を被災地内外へ普及、展開し

ていくことが今後の取り組む方向性となっている。同じ地域にいた方や共通項を持った方々がグループとなり、復興活動当時の状況について意見を出し合い、整理し、今後の地域づくりに向けてどのように活かしていくかを議論していくイベントとなれば、復興庁の方向性とも近いと思う。

- ・過去につながった方々と思い出の振り返りを行い、その方々が他の方にも岩手に関連した情報を展開、紹介することで、今までのつながりをもとに、新しいつながりに広げていくこともできるのではないかと思う。
- ・実践の場の第2部で、地域の魅力や、取り組んでみたいことについて話してもらうことで、地域で活動している方や住んでいる方にとって新しい発見ができるのではないか。地元の方も参加したいと思ってくれると思う。参加したい、楽しもうというイベントであれば意見も出やすくなり、結果、その内容をまとめることで意義のあるイベントになると思う。
- ・復興当時の団体活動に携わっていた方は、団体に魅力を感じたからだと思う。そのため、団体の代表の方だけではなく、活動に関わった方もインフルエンサーになり、その方々が当時の状況について面白かった、やりがいがあった等、熱量を持って話を来ていただくことは良いと思う。岩手と関りがあった方に対して、当時の熱量・想いを話すことにより、影響を与える、周りにも広げていけるのではないか。
- ・プレゼンテーターやパネリストを設けた形式的なイベントだと、会議のようになり、思い出を話す会にはならない。車座で話すことをイメージしており、思い出を話す会に重きを置いた方が参加者も集まるのではないか。例えば、参加者には写真を3枚だけ準備していただき、あとは自由に話していただくといった方が参加しやすくなると思う。
- ・一般市民の中でも、思い出話をするイベントと集客すれば関心を持っていただける方はいるのではないか。

5 次年度以降の協議会に関する説明

復興庁本庁より、事務局提出資料（資料1）をもとに、現時点における次年度以降の協議会に関する考え方について説明した。

6 意見交換

東日本大震災から10年が経ち、復興状況が変わっている中で、協議会としては多様な主体が参画しているという特徴を活かしつつ、取り組む課題を絞り込むことが重要との意見が挙がった。また、意見交換会については、具体的なアウトプットを出すために、現場感があるプレーヤーと一緒にプロジェクトを組成し、課題に対して一緒に取り組むアイディアが出た。

＜主なご意見＞

- ・副代表団体とは個別に連携をしているが、同じ場に集まって意見交換ができる協議会は有難いと思っている。一方でどのような場にするかは議論が必要だと思う。運営委員会は3県の副代表団体が集まる場であるが、活動報告だけで終わっているため、議題や進め方などは改善が必要だと思う。また、意見交換会は参加者側のメリットがあれば良いと思う。

- ・ 協議会を更に良くするために、現状維持のままのやり方ではなく、やり方を一部変えていくことも必要なのではないかと思う。
- ・ 当協議会は、復興の先を見据え、復興に向けた新しい取組や、挑戦をしている団体活動を共有し、どう活かしていくかを考えている組織だと理解しており、そのような組織を立ち上げていただいたことは有難いと思っている。震災から 10 年目を迎える、復興状況は変わっているため、協議会として現在の課題感を明確にする必要があるのではないか。
- ・ 協議会として、何を目的とするか、注力ポイントにメリハリをつけることが必要だと思う。県庁とし、「心のケアやコミュニティの再生」、「生業の再生」、「震災の事実と教訓の伝承」の 3 つが引き続き取り組むべき中長期的な課題と整理している。1 年でこの 3 つの課題に全て取り組むことは難しく、年次ごとにどれを取り組むか、優先度をつけながら絞り込んでいくことが必要だと思う。
- ・ 意見交換会は、アウトプットを意識することが大事だと考える。現場感があるプレーヤーとプロジェクトチームを作り、取り組む方法も良いのではないか。プロジェクトを走らせ、成果を測ることでノウハウが蓄積され、次につなげることができると思う。何かを作りだし、取り組み、測ってみることが重要だと思う。
- ・ 昨年度他県における実践の場の事例で、特定の自治体での個別の取組にフォーカスしたケースもある。今年度、実現はしなかったが、その後の活動状況をフォローするなど、個別の取組の支援をしてはどうかという意見も出ていた。
- ・ 年に三回の意見交換会だと、具体的なアウトプットまで結びつけることは難しいと感じているため、三回で何ができるかを考えないといけない。来年度、岩手復興局は釜石市に本拠地を移すため、沿岸部の団体を交えた意見交換会もできるのではないかと考える。

7 閉会

実践の場は、過去につながりがあった方や同じ地域と関わりかあった方が集まり、復興当時の思い出を振り返り、今後の関わり方について話し合う企画の方向性で決定した。企画内容を詳細化し、参加者への声掛けを進める。

以上